

札幌医人伝

札幌には、各分野の第一線で活躍する医師たちがいる。

情熱のカタチは異なっても、患者のことを思う気持ちに変わりはない。

そんな「医人」たちの横顔に迫ってみた。



専門性が高く高度な技術が要求されるケースでも、入院を必要としない日帰り手術が可能。患者にとって手術を受けやすい環境作りを目指す。

眼科医

札幌かとう眼科

加藤 祐司

Kato Yuiji

大学病院で得た
経験やノウハウで
地域医療に貢献したい

旭川医科大学で眼科講師兼医局長を勤めていた加藤祐司先生が、個人クリニック「札幌かとう眼科」を開院したのは昨年の7月。大学病院という環境のもとで専門性の高い治療に数多く携わってきたが、そこで得た経験やノウハウをひとりでも多くの患者に還元して地域医療に貢献したいという思いから、かねてからの念願だった独立に踏み切った。日々、日進月歩の勢いで目覚しく進化していく眼科医療。しかし患者にとって敷居が高いものではそれも意味がないと考え、「目指したのは、地域に根ざした『街医者』的存在。その中で、高い技術を要する医療を提供していければ」と、あくまで誰も

が気軽に足を運べるクリニックを標榜している。

眼の疾患は、中高年以降の加齢が原因で発症するものも少なくない。レンズの役割を果たす水晶体が濁ってものが見えづらくなる白内障は、その代表的なひとつだ。最も一般的な治療は、手術で濁った水晶体を砕いて吸い出し、人工水晶体（眼内レンズ）を挿入する方法。従来はレンズのすべての箇所が同じ度数である「単焦点レンズ」が用いられていたが、現在では老眼に対応した「多焦点レンズ」や乱視矯正も可能な「眼内レンズ」などが開発され、白内障の根治とともに視力も回復するという画期的な治療として注目を浴びている。そうした手術をはじめ、網膜中心部に位置する黄斑の異常で視界に歪みやぼやけが生じる加齢黄斑変性、網膜剥離や糖尿病網膜症



人工水晶体の眼内レンズの模型。白内障が原因の見えづらさを解消するだけでなく、そこからさらに視力を回復させる「多焦点レンズ」が注目されている。

そもそも、そうした専門的医療を一般のクリニックで提供したいと考えた直接的なきっかけは何だったのだろうか？

に付随する硝子体手術、眼から鼻に抜ける涙の通り道が閉塞することとで生じる流涙症（なみだ目）など、極めて高度な技術が必要とする手術もほぼ日帰りでの対応が可能。最新の装置や器具を導入した手術で傷口を最小限に抑えることは、日常生活への早期復帰にも繋がる。

「通常、個人クリニックで手術できるのはおそらく白内障ぐらいまでで、硝子体レベルにまでなると、大病院を紹介されてそちらで手術を受けるということが多いのではないのでしょうか。でも私は、そうしたケースにもできる限り対応していきたいと思っています。患者さんにとって今までは敷居の高かった治療をクリニック規模の病院で、しかも入院の必要もなく受けていただくことは、以前からの願いでもありましたので」

「大学病院にいた期間が、結構長かったんですね。医局に属して色々な先生とカンファレンスしたり知識を高めあうことも非常に有意義なんです。40代を迎えて、かねてから自分の中にあっただけという手術がやりたいという理想をそろそろ実現したいと強く思い始めるようになったんです。そのまま大学に残る道もありましたが、開業するならば、医師として脂の乗った今しかないということもあって。もちろん開業することだけで満足はしてられませんから、学会にもなるべく足を運んで最新の情報を取り入れています。患者さんが希望される技術を提供できるよう、常に自分をアップデートしていくことも忘れないようにしていますね」

4月からは、休診日を利用して天塩町の町立病院で外来診療も行っている。近郊に眼科がないということもあり、月一回の診療日には予約が殺到。多忙を極める日々だが、それでも「多くの患者さんを診ることで勉強になりますから」と笑顔を見せる。また、患者の視線に立った思いは、治療そ

患者さんにとって敷居の高かった治療を、
個人クリニックで受けていただくことは、
以前からの願いでもありました。



PROFILE

1967年生まれ、札幌市出身。1993年、旭川医科大学医学部卒業、同眼科入局。1999年、同大学院医学研究科修了。釧路赤十字病院眼科副部長、旭川医科大学眼科講師・医局長を経て、2011年7月に札幌かとう眼科を開業。札幌医科大学眼科非常勤講師、日本眼科学会医、日本眼科学会専門医、同指導医、ボトックス治療認定医、眼科PDT認定医。

札幌かとう眼科



札幌市東区北31条東16丁目1-22 TEL.011-780-2111
診療時間 / 月・火・水・金 9:00~12:00 15:00~18:00
土・第2、4日 9:00~14:00
休診日 / 木・第1、3、5日・祝 <http://katoganka.jp/>

「確かに、休める時間はなかなか取れないですね。でも、今はそういう使命を背負うべき時なんだろうなと思っています。なので、なるべく守ることは考えずに。個人のクリニックで何ができるのか、どこまでできるのか。これからもその姿勢を貫いて、可能性を追い求めていきたいですね」

ものだけにとどまらない。術後の視界に不安を抱える人や足腰が不自由な高齢者には、送迎のサービスなども行っている。待ち時間を少しでも軽減するため、先進的な予約システムを導入。「医人」は常に患者が何を望んでいるのかを考え、そのために何をすべきかを考える。